

*優秀賞

夢の実現に向けて



山形県立村山産業高等学校

環境クリエイト科三年 岡田 梨江

私の夢は、東根市を新たなリンドウの産地にし、農業県山形をさらに盛り上げる事だ。

私の住む東根市は啓翁桜の産地として知られ、栽培面積・生産量ともに全国一位を誇る。全国や世界に誇れる高品質の県産品ブランド「山形セレクション」に花き分野で唯一認定されている品目だ。また、県産サクランボの主要品種「佐藤錦」の発祥の地でもあり、朝晩の寒暖差の大きい気候が甘い果実を生み、啓翁桜を淡いピンク色にするそうだ。

我が家は非農家だが、草花栽培や植物バイオテクノロジー等に興味があり、現在の村山産業高校に入学した。学校ではトウモロコシや白菜、花壇用草花等の栽培を通し、生育の特徴や管理作業の重要性を学んだ。また、インドアガーデンやフラワーデザイン等の利用に関する分野も学び、草花への興味を一層強くした。実用的な技術を身に付けたいと思い、二年生の時に室内園芸装飾三級を取得した。三年生になり、「プリザーブドフラワー」という草花の加工方法を学び、アレンジメントの製作・販売も行っている。課題研究では先輩の研究テーマを引き継ぎ、リンドウの大量増殖に取り組んでいる。

県内のリンドウ産地は、最上町や鮭川村等の最上地域をはじめ、尾花沢市や上山市が知られている。中山間地の転作作物として作付が始まり、今では本県オリジナルの品種も複数栽培され、花色や花形の良さから仏花としての利用にとどまらず、アレンジメントの素材としても需要が伸びているそうだ。リンドウ栽培に関する情報を得るため、最上町の花き栽培を調べたところ、啓翁桜の栽培も多い事に気付いた。

降雪量が多く雪解けが遅い、夏場でも霧がかかり日差しが遮られるといった不利な環境条件を逆に活かし、開花期の異なる品目を組み合わせた効率の良い栽培体系を行っている。最上町で啓翁桜が栽培されている。東根市でもリンドウが栽培できるという考えが浮かんだ。この考えが実現できるものか更に調べると、不可能ではないが出荷数が確保できないと市場流通が厳しくなる事から、リンドウ栽培に適した土地に限定して団地化する必要があると分かった。また、最上地域が産地になった経緯には、当時のJA職員による熱意ある指導があった事も知った。

残念ながら、今の私にはリンドウ栽培に関する知識が少ないだけでなく、転作田を花き栽培に向く土壌に改善する方法や個人農家を集めて団地化する方法等、農業経営に関する知識は全くない。簡単ではない事は分かるが、東根市の新たな特産品にリンドウを取り入れ、啓翁桜に次ぐ「山形セレクション」認定品目にするという更なる目標も生まれている。夢物語ではなく実現に向けた第一歩を踏み出すため、高校卒業後は農業大学校に進学する。そして、東根市の気候や土壌に合ったリンドウ栽培の方法はないか、草姿や花持ち等の品質を左右する要素は何か、高品質なものを生産するための管理技術等、栽培面の知識だけでなく、市場への出荷方法や高価格で取引してもらうためのポイント、六次産業化を図るためのフラワー装飾技能士資格の取得等、幅広い知識を身に付けるつもりだ。同時に、私の夢を後押ししてくれる仲間を見つきたい。

非農家出身の私がこの目標を達成する方法は二つあると思う。一つは、花きを経営品目とする農業法人に就職する事、もう一つは、JAの営農指導員になる事だ。どちらにせよ、私自身が農業人としての知識と技術を身に付け、経営のノウハウを学ぶ必要がある。空港や新幹線の駅があるという交通の便に加え、全国的なイベント開催等で年々観光客が増えている東根市。流通面では、最上町に勝る立地条件だ。栽培条件を同じにするのは難しいが、啓翁桜を栽培している地域にリンドウ栽培の導入を勧め、夢の実現を目指したい。

*優 秀 賞

私の家の農業経営改善



山形県立村山産業高等学校

農産システム科三年 清野 一哉

私が住んでいる大江町は周りが山々で自然環境に恵まれており、リンゴやサクランボを中心とした数多くの果物生産が行われています。私も将来は、家の果樹園を継ぎたいと考え、村山産業高校に入学しました。先生方は、農業の基礎・基本に関する学習を優しく教えてくれます。現在は三年生になり、課題研究でリンゴの栽培に関するプロジェクト学習に取り組み、省力管理や安全で安心して食べられるリンゴ生産を目標に研究活動を行っています。これまで学んだ果樹栽培に関する基礎・基本があり、それらに基づく実技指導は、私にとって我が家の課題を解決するための手段となっています。

しかし、専門高校で果樹栽培について、一通りのことを学んだとはいえ、実際の経営に携わったとき、それだけで足りると思えないのです。リンゴの産地形成を考えたとき、地域全体で統一された基準以上の高品質なリンゴ生産が課題とされます。

私の家もリンゴ栽培を中心とする専業農家で、現在百六十アールのリンゴ園を父と祖父の二人で経営しており、生産を中心に取り組んでいます。私の家の果樹園は、伏流水で形成されている川の近くにあることから、気温の寒暖差が生じることで、蜜入りの高品質なリンゴ生産ができます。高品質なリンゴは、朝日町の蜜入りリンゴ同様に高値で取引されています。

これらのリンゴ生産技術は、農業協同組合営農指導員の方々の適切なアドバイスがあったからだと祖父と父が教えてくれました。

私の家のリンゴは、地域の農業協同組合へ出荷することで、全国の

消費者へ提供されることになりました。ほんのわずかですが、美味しいからと、知り合いの人に依頼されて送ってやるものもあります。

しかし、すべての生産物が、高品質なものだといえないので、経営の安定化を考えた場合、高付加価値をつける手立てとして農産物の加工技術を取り入れることを考えています。

また、これらのことを実現するためには、経営形態を見直し、法人化にすることだと私は思っています。経営を分業化することで、専門的な知識や技術を専門のパートナーごとに身につけさせることが可能だといえます。経営を分業化させることが、高度な技術を効率よく生かせると考えたからです。資金が必要な加工場建設については、農業協同組合との連携を強化することで建設を可能にし、地域の生産者が共通で利用できるようにします。

さらに、地域の活性化を考え、働きたい人達に雇用の場を提供することです。農用地を所有しているが、高齢化のために重労働が困難な人には、専門の担当区で軽作業が可能な場所での労働を可能にします。経営者の参加で、経営に関する知識と技術力のアップや農業法人としての経営規模の拡大にもつながるといえます。

販売方法は、地域の自然環境のすばらしさと食の安全を全面的にアピールし、町に働きかけ、パンフレットの作成や大江町の農業の良さを全国に向けて、発信して行くことです。その実現するためには、同じ志を持つている経営者が横のつながりを持つ必要があります。

横のつながりのもう一つとしては、経営の安定化にむけて、果樹園の樹種の検討が必要です。リンゴだけでなく、地域にすばらしい指導者がいるプラム導入の検討を考慮しており、栽培している果樹の種類間で自然災害に対する経営の安定化を実現します。

私はこれまで述べたように、地域農業を一企業体に変え、生産・加工・販売までの六次産業化実現に向け努力していきます。そのために私は、農業大学校進学を希望しており、より専門性を追求していきます。

*優 秀 賞

食の安全について考えること



山形県立村山産業高等学校

農産システム科三年 桃園 貴大

島国である日本は、限られた土地で生産を行っているため、食べ物ほとんどを輸入に頼っています。現在、日本の食料自給率が約四十パーセントと半分以上も輸入に頼っていることに加え、近年のある政策によって、日本の食の安全がさらに脅かされています。

その政策とは、TPPへの参加です。TPPとは環太平洋経済連携協定の略で、アメリカや日本などの十二カ国が参加をしています。TPPの内容は、関税の撤廃や輸出入について各国のルールや仕組みの統一を図ることです。国境を越えて物が自由に行き来できるようにし、サービス、食の安全性や医療、雇用、投資等に関するルールや仕組みを統一することによって、貿易の活性化をすることが目的とされています。

しかし、日本では貿易の活性化だけでなく、農業経営者や食の安全に対して多くの問題点が発生すると予測されています。

貿易が活発化し、食料の半分以上を輸入に頼っている日本では、さらに多くの外国産の食料品が入ってきます。しかし、輸入された食料品の全てが、安全だと言い切れないところがあるのです。それは、TPPによるルールや仕組みが統一されるからです。その一つは、残留農薬の規制緩和があります。日本の農産物の生産方法では、農薬は必要最小限の使用が決まっており、各家庭の食卓に並ぶまでには残留農薬が安全値を下回るようになっていくからです。また、食品添加物の使用について、日本では約八百品目が認められていますが、米国では約三千品目の食品添加物が認められているのです。約二千品目しか日

本では認めていない中で、ルールが統一された場合、輸入品の安全性が大きく損なわれる可能性が出てくるのです。

二つ目は、検疫の規制緩和についてです。日本の食品添加物や残留農薬の基準値は、世界の中でも最も厳しいとされています。そのため、検査には多くの時間がかかってしまいます。TPPでは、貿易の効率を上げるために関税を撤廃し、関税の手続きをすばやく簡単にすることで、時間の短縮化を図ろうとしています。さらに、検疫にかかる時間も短縮化を図ろうとしているのです。これによって、これまで培ってきた日本の食料の安全が確保できなくなる危機的な状況に追い込まれています。

貿易が活性化することで、国際競争がより激しくなってきます。輸入品の利点は、価格が安いことです。消費者の家計を考えると、安全性が低下しても安い方を選んでしまうのではという心配もあります。このように、激化が予測される農産物の国際競争の中で、日本の生産者がこれから取り組むべきことがあるはずです。日本の生産者が第一に考えなければならないことは、農産物の低コスト化を目指すことです。二つ目は、日本人にしかできない高品質で高付加価値をつけた農産物の生産への取り組みです。

日本で生産された農産物は、安全であって安心して食べられ、新鮮であることです。「地産地消」という取り組みも、地元産であれば新鮮であり、安全性の確認ができて安心して食べられるということがいえます。それがいえるのは、全国に農産物直売所の設置が年々増加していることです。直売所は、生産者が直接価格を設定して販売することから、市場を経由する必要も無くなり、輸送コストや人件費も省くことができます。生産者が直接販売することで、生産者が消費者のニーズを直接確認することもできます。

私は農業後継者として将来を見据え、このように消費者との対話ができるような仕組みを数多く取り入れ、安全を第一の目標に輸入農産物に負けない農業経営を目指していきます。

*奨励賞

これからの林業に私ができること



山形県立村山産業高等学校

環境クリエイト科三年 岡田 倅 輔

私は、中学生の時に自然体験学習で山から伐採した丸太を運び、その材を使い炭焼き体験をした。そこで、樹木や自然と人との関わりを学び、とても興味を持った。その経験から、現在の村山産業高校の環境クリエイト科に進学を決めた。高校の授業では、学校林での実習を通じて、森林の保育管理の方法と伐採した木材の利用について学習した。その中で、私がこれからの林業に必要なと思うことが二つある。

まず一つ目は、森林の保育管理だ。私は学校で、下刈りや除間伐などについて学習してきた。森林には多面的な機能があり、そのすべてが注目されている。林業白書によると、その機能の中でも、「山崩れや洪水などの災害を防止する働き」と「二酸化炭素を吸収し地球温暖化の防止に貢献する働き」が最も高く期待されているが、保育管理が不十分なために林地が荒廃し、機能が十分に果たせていないというのが現実だ。戦後の昭和三十年代に木材の需要が高くなり、全国的に広葉樹林を成長の早い杉などの針葉樹に切り替え植林する「拡大造林」を実施したことで林業は活発になった。しかし、昭和四十年代の外材の輸入により、国産材の需要が減り、日本の林業は衰退した。その結果、伐採適期の立木が多く植生しているが、適正な管理は行われていない。そこで、最も重要なことは伐採だ。伐採により、建築用材や家具などに利用する。さらに林地を更新し、森林の機能を十分に発揮できるようにしていくことが大切だ。

二つ目は、担い手不足である。戦後、林業が活発だった時は十五万人の従事者がいた。しかし、現在はその三分の一に留まっている。理

由は、危険を伴う作業が多いことからだ。県森林研究研修センターが主催する森林サポーター事業を通し、私自身も林業の危険性を実感した。その事業で行った下刈り作業は、樹木の成長を阻害したり、被圧したりする下草を除去するものだ。夏の暑い時期に行う上に、スズメバチなどの活動も盛んである。また、間伐作業は、林分密度を適正に保ち、立木の成長を促すとともに、土砂災害防止や生物の多様性などの機能につながる。しかし、その作業は労働災害が最も多く発生しており、死傷者が後を絶たない。樹木の重心位置と周囲の立木との位置関係を見極め、安全な方向への伐倒をしなければならぬ。どちらの作業も想像していた以上に過酷なものだが、樹木の成長と良質な材の供給には欠かせない作業なのだ。そんな中、平成十五年から林業への就業を望む若者に対し、必要な基本技術を習得支援する「緑の雇用事業」が実施された。その結果、年々新規就業者が増加し、現在は事業前の平成十四年に比較すると一・三倍の約二千八百人になった。また、高性能林業機械の導入で、伐倒、玉切り、集材の一連の作業を機械化し、作業能率の向上と安全で効率的な作業が可能になったことも、就業者の増加につながった。これを裏付ける事柄として、全国各地で「林業女子会」という女性が活躍する場が増えたことが挙げられる。仕事の内容としては、機械のオペレーター等として従事し、活躍の場を広げているのだ。このように、機械を導入することで女性も積極的に活躍していることも注目される。

林業現場で直面する様々な問題は着実に解消されており、再び産業としての林業が注目されつつある。私は、山形県立農業大学の林業関連学科へ進学し、これまでの経験を生かし、知識を深めていきたい。山形県の林業活性化のために、更に知識と技術を習得し、積極的な森林の更新と木材利用を推進していきたい。また、林業を活発にしたいという強い志を持つ仲間を見つけ、仲間と共に、県内だけでなく日本における、これからの林業に大きく貢献したい。